

第2セッション

北海道厚沢部町の取り組み

厚沢部町
政策推進課 係長
木口 孝志



厚沢部町の木口でございます。私からは町で取り組む事例を簡単にお話させていただきます。

厚沢部町には令和元年の4月に開園した認定こども園「はぜる」があります。



当時は移住のハードルが高いと思っており自分も若かったというのもあって、先生たちと子育てをめちゃめちゃ頑張つたら人が引っ越ししてきてくれるのではないか、と夢物語ではないですがそのような思いをもっていました。そしてだつた世界一のこども園を目指して作ろう、というのを合言葉にこども園の立ち上げに従事していました。

令和元年にこども園が完成はしたのですが、当時、役場の中でも上司や上の方々、議員を含めてやはり子育てに向き合うことになんてそんなにお金かけるんだとか、なんでそんな立派な建物が必要なんだとか、どうせ子どもはいなくなるだろうとか、そういうことをいろいろと言われました。

それでもやはり今いる子どもたちやその保護者の方々に少しでも満足いただけるものを提供したい、そういう子育ての街を作りたいと考え、先生たちと一緒に頑張つてやりました。令和元年の4月に完成した時に、いい建物ができたねという方はたくさんいらっしゃったんですけども、結果としてそこから移住がすぐに増えるかというと、当然増えず、その時に色々また考える部分がすごくあって、簡単なものではないというところと、もっと違う方法も考えなければならぬと思いました。

そこから月日が流れ、今は「保育園留学」という取り組みをしてます。



厚沢部町の認定こども園に通いたいお子さんを一時預かり制度を使って都市部からお預かりするもので、親御さんは一緒に来ていただいて、町の移住体験住宅などで1週間から3週間滞在をして、そこでテレワークなどをしながら厚沢部町で過ごしていただくという仕組みを行っております。



よくある親子ワーケーションと言われるような取り組みはたくさんあると思いますが、厚沢部町は親御さんのテレワーク、親御さんの仕事は主ではなくて、あくまでも子どもを主役としていて、子どもにこれだけの思いで作った厚沢部町の認定こども園に通っていただく、通いたいと思ってもらえるというところを目指しています。

まず子どもがうちの「はぜる」に通いたい、そこから親御さんも一緒に来て厚沢部町で生活をするという取り組みを現在は進めています。

昨年から正式に内閣府の事業を使いながら進めていて、たくさんの方に来ていただいていますが、受け入れ住宅が不足していたり、先生たちの不足とか新たな課題もたくさん出てきています。実際に移住をしたいと言ってくださる方も徐々に増えつつはありますが、住むところの問題、空き家はたくさんあるけれどなかなか住むところがないですとか、そのような新たな課題も見えつつあります。

まずは子どもたちにとって幼少期にすごく貴重な体験などを厚沢部町だけではなく全国の方々と共有をしながら子育てをしていくというような取り組みを今現在、厚沢部町では進めています。



保育園留学の効果

保育園留学の効果としては地元への経済効果というところがすごく大きいです。アンケート調査等を行っていますが一家族が滞在する中でおよそ10万円から20万円程度の地元への消費額があることが分かっていて、昨年は150組の利用家族がいたので、1500万円から3000万円程度の地元への経済効果が生まれているというところが、小さな町ですのですごく効果は大きいと思っています。利用された方々の満足度もすごく高く、2年目を迎えてますが、今年来られている方の3割ぐらいがリピーターの方で、すごく継続性のある事業になっているなど感じています。

移住者も今年6月に東京から来てくださった方、今週末には京都から引っ越して来てくださる方もいて、来年の春に引っ越してきてくださる方も出てきているというような状況です。

ただこの事業は関係人口を増やそうと始めており、現在6家族分の住宅を用意して年間を通して受け入れる取り組みをしています。この住宅の稼働率が100パーセントになればなるほど、人が変われば必ず6家族の子育て世帯が厚沢部町にいるという実態が出来上がってくると思います。それができるとあとは移住者とは住民票があるかないかだけの違いでしかなく、確かに住民票があることはすごく大事ですが必ずしもその住民票の数字の1、2を求め続けて何も成果が出ないよりは、関係人口であっても必ず人が来てくれるサイクルが出来上がれば必ずそこに人がいて、子どもは認定こども園に預けてくれて、親御さんが仕事をして町にお金を落としてくれるということができ、それは移住者と同じ意味をなす関係人口になると思っています。

昔から行政はずっと移住してください、定住してください、永住してくださいということを言い続けてきましたが、それで成果が出ない自治体はたくさんあります。なので時代を読んだり、そのように行政側が柔軟になる必要があり、一概に移住者ばかりを求めるだけで、関係人口という取り組みも成果のひとつだと思っています。

第2セッション

北海道ニセコ町の取り組み

ニセコ町の取り組みの背景を少し説明いたします。札幌からの立地は意外と良くて車で夏だと2時間ぐらいで来れます。ニセコ町の特徴としてスキーだったり、秋はかぼちゃが並んでいたり、自転車をやったり、アイスがおいしかったり、ラフティングができます。いわゆるリゾート地として働く場所もたくさんあります。



ニセコ町の特徴

- ★ 観光資源が豊富
大自然、おいしいもの、温泉…
- ★ 増える人口（特に年少人口）
進む国際化
- ★ モデル的なチャレンジ
・SDGs未来都市
・環境モデル都市
・持続可能な観光地域GSTC
・ニセコFCI実践自治体

北海道ニセコ町
All Rights Reserved. Copyright 2023 NISEKO Town of education

北海道の中でもニセコ町は子どもの人数や子育て世代の人数がすごく増えている町で、人口自体は5000人ぐらいしかいないのですが人口は微増傾向にあります。その背景のひとつとして急速にインバウンドが進んだというところがあります。このスライド(下図)を見ていただくと、この右肩上がりはおそらく異常に感じると思います。

急激に進んだインバウンド



本当にニセコの町が大きく変わったっていう印象があります。私もニセコに来て20数年経つのですが全然雰囲気も様子も当時とは違っていて、特に冬の間だと人口5000人ぐらいのうちの1割ぐらいが外国人になります。国籍でも30国籍ぐらいいると思います。

ニセコ町
こども未来課 課長
齊藤 徹



それを見具現化したものとして、小中学生まちづくり委員会や子ども議会も20年以上続けています。小中学生の町づくり委員会はフィールドワークを中心にして、自分たちの目で町の課題を見つけながら子どもたちなりの議論をして実際に町長に提言を行うような取り組みです。子ども議会は本当の議会と同じように一般質問を事前通告をして、本当に議会と同じ説明員が全員議会に出席して、本当に議会と同じで、GATCHINCOで子どもたちの意見に対して答えていきます。その取り組みが子どもたちにとってとてもいい経験であったり、町職員も子どもたちに分かりやすいように説明することで職員のスキルアップにも繋がっています。

実際に子どもの意見が反映された取り組みの例ですが、暗い道があって街灯が少ないがなんとかしてくれないか、に対しても実際に次の年には予算化をして街灯を再整備したり、ニセコ町は給食がすごく美味しいと評判があって、子どもたちと給食の話をしたら自分たちで給食のメニューを考えようとなり、子ども町づくり委員会がメニューを考えてそれを給食センターの栄養士さんが実現してくれて町の中にある小中高校に実際に配膳を行い1週間ぐらい、「ニセコ町のふるさと給食」として出されました。

また景観条例という美しい景観を守るために条例があり、その中にふるさと展望台というのを設定できる決まりがあります。それを実際に子どもたちが探して町長にこの場所にしようと提言して、それが実際に観光スポットにもなっています。ダチョウ牧場とかちょっと面白い、子どもたち目線で面白いなという場所が実際に観光名所になってたくさん的人が来てくれるようになりました。

こういった子どもたちのまちづくりの参加は子どもの自己肯定感を高めていくような取り組みと考えています。実際に子どもたちに役に立っているよ、あなたはこの町に必要だよというようなことを本当に実感してほしいと思いながら仕事をしております。

決して議会ごっこではなく、大人と子どものような上下関係といった関係性ではなくて、本当に対等にひとつの子どもという、ただ個性が子どもというだけというような視点で町づくりに活かしていく、それによって子どもが実際に僕たちの意見が街の取り組みに反映されているということを実感していただくことで、自己肯定感を増していくとか、自

分の存在価値を感じてくれると思います。例えば学校ではあまり居場所がないなと思ったけれど、こういうところで頑張って出てきて自分の意見が通ったということが、すごく自分の自信に繋がったり輝ける場所だったり、自分の居場所のひとつだと思って来てくれたりとか、そういうことが子どもの行動が変わってきてるなという風に感じております。

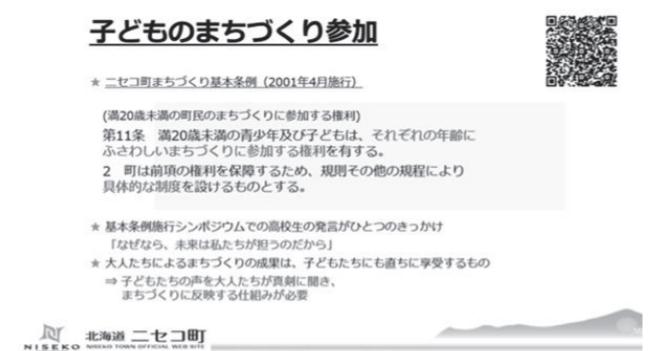
ユニセフの「こどもにやさしいまちづくり事業」というチャイルドフレンドリーシティーズイニシアティブというこの頭文字をとってCFCIというのですが、この取り組みとして日本型CFCIの自治体として正式承認されているのは全国でニセコ町の他に合わせて5自治体だけです。これを取り組んできたら何か新しいことをやるとかではなく、実際にちゃんと子どもに優しいまちづくりを行っているのかという自己診断をして、次にまた繋げていく、こここの部分が苦手だなというのを見えてきます。そういうところをまた次の施策につなげていくといった取り組みをやっています。

子どもに優しい町ということで、子どもの人権を守る、子どもも町づくりに参加していく、そういう取り組みの中で「SDGs未来都市ニセコ町」は2018年に国から選定されている正式な肩書ですが、そういういろいろな角度から町づくりをしている取り組みの一つです。

子どもにやさしいまち

子どもの人権を守り、
子どももまちづくりに参加

持続可能なまち
SDGs未来都市ニセコ町
(2018年に国から選定されました)



第2セッション

4人の子どもの父親としての取り組み

俳優
杉浦 太陽

子育てについて感じていること

杉浦家の育児方針としては子どもたちが4人いるので意見も様々ですが、長女は今16歳になるので13年ぐらい前から夫婦で話し合っています。みんなパパママ1年生から始まるので、試行錯誤です。

子どもは初め視力が0.04ほどの見えない世界からできる手段として泣いて、だんだん見えてきたら次は喋れないから一生懸命アクションするというように、子どもなりのすごい主張を生まれながらにしています。それを親だからと言って、何歳になったからこれをしなさいとか、外行っちゃダメよとか、これを食べちゃダメだよみたいな、上から押さえつけるんじゃない、教育的には、喋れるようになったら、じゃあなぜこういうことをしたの?とか、イヤイヤ期もなぜこれが嫌なのか、必ず本人に聞いてから、これが嫌なんだねって、でもこういうことはしちゃいけないよ、と伝えています。

親が押し付けるんじゃない、子どもも人間なんだから子どもの意見も尊重して、夫婦で理解しながら、子どもの気持ちを尊重した上で教育をしようという考えでずっとやってきました。

子どもは成長しますから6年生とか中学生になる頃に思春期に入って、僕自身もあんなに可愛かった娘から無視をされる日々が2年間続きまして、あれだけ愛情を注いだのにこんなに無視されるのか、というすごく辛い2年間でした。それでも妻と相談しながら、声だけはかけ続けようと。そして彼女のやっていることを否定しないでおこう、応援しよう、そういうことを続けました。

中学3年になると受験期に入ってくる中で、娘との間に見えないアクリル板がありましたが、どうやったらこれを取り払えるかなと、頭ポンだったり、おはよう、おやすみとずっと言い続けたんです。無視されても。

そうすると娘が悩んだ時に、「パパ」「どうした」「ちょっとこういう受験の悩みがある」「どうした全部聞いてあげる」と、パパとママと娘の3人会議をすると異性の娘だとパパに言いづらい時期があるんです。それがママが入ることによって、ママから回って三角形キャッチボールをしているうちに、思春期がだんだん終わり反抗期が終わっていって、ママを介さずにパパにも相談をしてくれるようになりました。

だから、僕の教育方針の中で幼い頃から親が押さえつけるんじゃない、成長期だからといってこうしたらあかんで、じゃなくて、まずその子どもが何を考えてこの行動をしたのかという理解をしなきゃいけないと思っていて、友達とか恋バナとかいっぱいありますけど、「好きな男の子ができた?なに!」じゃなくて、「どんな男の子だい?」と肯定していくと、親子の関係性もまた広がっていくから、それがうちの子どもたちが育っていた時に、その自分の子どもたちへの関係性もまた違ってくると思います。

僕の父親は絶対的な存在で家に帰つたら一歩も動かない人だったので、ずっと怖いというイメージがありました。逆にそれを経験しているからこそ、友達のような感覚、フラットな、お互い意見を言い合って、お互いリスペクトできるような関係でありたいという思いで、一生懸命楽しんで子育てをしています。これからのが未来が、こういうことが子どものまんなかの一部分になればなと思って、今回お話をさせていただきました。

これがまた長女が終わって、長男が中学1年生の思春期に入りまして、その次に5年生、本当に親は子どもから学ぶことだらけで子どもがいるから僕らは親にさせてもらっているという思いを大事に、こどもまんなか社会をこれからも応援していきたいと思います。

親同士のつながりについて
(奈義町で子育て中の大内さんの発表を受けて)

育児の中で1番辛いのは育児の孤独感です。ママ友、パパ友ができない中で、旦那さんが仕事に行って1対1ずっと子どもと過ごすというのは、もちろん育児は愛しい存在なんですが、それが逆にメンタル的に崩壊してしまうこともあります。長女ができた時は都心に住んでいましたが、僕が仕事を出て妻と娘が一対一の時が長すぎて妻のメンタルが壊れかけてました。なので妻の実家の近くに、ちょっと通勤は大変になりますけれど引っ越しすることにしました。そうしたら妻の地元の友達もいて、その頃のママ友も地元の方だし親も近くにいるという環境面でやっと妻の育児がほぐれたと言います

か、やっと楽しめる育児ができるようになったと思いました。

ママ友ももちろんですが、一番交流を取りにくいのがパパ友です。ママ友は仲良くなてもパパ友はみんな孤立しています。そこで僕はその解決策として、妻が一番仲がよいママ友の旦那さんと仲良くなろうと思いました。そうすると腹をわってだんだん話せるようになるし、ママ友とパパ友が同じ親だったら、家族ぐるみで付き合っていけるようになります。なかなか男同士って年齢も違うし先輩後輩みたいなものがあって、パパ友になりませんか?とはなかなか言いづらいんですが。

また祭りとかイベント事は結構パパたちは得意だったりします。今年夏祭りに参加したんですが、パパ友に誘われたけれど地域に溶け込みづらいし、大丈夫かなと思っていました。

ですが、妻も誘って一緒に参加して小学校でみんなで焼き鳥を焼いて、僕は3000本焼いて完売しました。そうすると一緒に焼いていたパパ友が戦友になっていくんですね。地域密着の小学校のイベントとかPTAとか入っていいのか、迷惑かけないかっていういろいろな不安がありました。いざ飛び込んでみるとみんな仲間だと思えました。やっぱり自ら行動する勇気っていうのも必要だと思います。

こどもまんなかは、子ども子どもとありますが、それを育てる親のメンタルとか環境とともにすごく大事だと思うので、そういう面で親同士の意見交換も、こどもまんなか社会の繋がりになるのかなと思います。



第2セッション

奈義町の子育て応援

奈義町立奈義中学校
校長
松本 健



私がまだ独身で、中学校に勤めていた時、子育て世代の女性の先生へ「これから子育てで何が必要ですか」と尋ねたら、「余裕です」と言われました。重ねて「何の余裕ですか」と尋ねたら、「時間、精神的、プラス金銭的」とはっきりと言われました。なにかことが起こった時にちょっと用立てられるお金があったりだとか、すぐに駆けつけられる時間の余裕があつたりだとか、それらを含めて精神的な余裕ではないかと思います。

奈義中学校に勤めていて、私は奈義町で子育てをしたことではないのですが、羨ましいなと思っていることがたくさんあります。町内で子育てをされている大内さんはよくご存じのことだと思います。

学校現場で子どもが危険な目に遭った、あるいは危険を感じた箇所はほぼ1週間以内に改善されます。具体的なことを言いますが、B&Gの野球場のバックネット下に少し隙間があり、そこへ公式戦の試合中にボールが飛び込みました。野球のルール上、基本的にはボールデッドでプレイを止めなければなりませんが、すぐに跳ね返ってきたので球審はプレイを続けられました。試合終了後、その球審の方からもしそこで止まつたら選手がボールを捕ろうと手を入れて怪我をするかもしれないで直してもらった方がいいですよと助言されました。その旨を教育委員会へお願いしたところ、次の週に当時の教育長からどこをどう直せばいいのか、自分は今グラウンドにいるのだが授業が空いているのならグラウンドに来て欲しいと連絡がありました。現地にて状況と要望をお伝えすると、1週間後にはすでに改善されていました。

子どもが誤ってガラスにぶつかり、大怪我をした時のことです。今では当たり前のように全て強化ガラスが入っていますが、当時はまだ努力義務で入っていました。その時にも子どもが向かい合うところのガラスは全て替えると即決され、すぐに強化ガラスに入れ替わりました。

いい意味でとんでもない町だなと思っています。

更にもう10年ほど前のことですが、たまたま教子の見舞いに中央病院へ行った時のことです。卒業した高校生が入院していて、付き添いのお母さんに、「中学校まではいいけど高校になったら大変ですよね。」とお話ししたところ、「入院

費、奈義は無料なんですよ。」と言われました。驚きました。そのような支援が今日まで脈々と続いています。

また、奈義町には高校がないので一旦外に出ます。変な話ですけど、高校行ったら奈義町を出た子が割と固まっているのです。理由を尋ねると、「津山では何があるかわからんけん不安で。こうがっちりしとかないと安心できん。」と。やっぱり仲間意識が強いのです。そういう思い、町全体で支えてもらえた安心感を子どもたちは知らぬ間にもっているのだと思います、間違いない。

アイターンの方など縁あって外から入ってくる方ばかりではなく、生まれ育った奈義へ必ず何人かは帰ってきます。町内における住居の問題だと仕事のことだと行政の方は大変なことだと思いますが、例えば、仕事が町外であっても車で通うことができるので家を建て、子育てするのはここで、というような場合もあるでしょう。そう心配するようなことでもないかなという安易な考えでいたりしています。

ただそれこそ見えないところで町が金銭面を含めた支援をしてくれることで、よその町に住むより経済的に余裕が生まれるのではないかでしょうか。チャイルドホームも私が来る前から運営されています。この施設は子育てについての相談ができる、精神的な余裕ももつことができるのではないかでしょうか。

これらのがずっと続いている。保護者の方々も大変だとは思いますが、多くの支援や恩恵を受けているのだからもう一頑張り、頑張ってほしいな、奈義町は子育てには非常にいい町だなど実感しています。私もご縁をいただいて、長い間ここ奈義に勤めさせてもらっています。本当に恵まれた学校、温かい町だなと思っています。

第2セッション

山陽新聞社にて思うこと

(株)山陽新聞社
論説委員会 委員 平井 美佳



私どもでは昨日偶然、全国の地方紙から論説委員会の責任者に集まっていた会議がありました。すごい書き手がたくさんいらっしゃったのですが、雑談をはたで聞いていると「どうしたら若い世代に新聞を読んでもらえるだろう」とか「DXが追いつかない」とか、そのような暗い話ばかりでした。ここまでみなさんのお話を聞きしていると明るい話題も多く、私たちはどうも社会の動きをきちんと見ることができていないのかもしれませんと感じているところです。

論説委員というのは一般的の記者とは違って、物事が起こっている現場から少し離れたところから全体を眺め、山陽新聞社の見解として「ものを申し上げる」ようなちょっと仰々しい仕事です。それで、今までどうしても政治や司法、経済といったいろいろな部署でトップを務めたベテランが配属されがちで、いわゆるおじさん率が高い職場でした。近年は、これではいけないという風潮が出てきたことで私も政治取材経験がほとんどないにも関わらず仲間に加えてもらい、子育て関係、女性が直面する問題、主にそういうものについて、当事者の立場を生かして意見を述べさせていただいております。

「こどもまんなか社会」がテーマのこの場で「地域のメディアとして何が課題か」と尋ねられました時、ひとつ言えるのは、属性が偏っていることでしょうか。オールドボーイズクラブとよくいわれますけれど、社員の属性が仕事一筋の男性に偏っているということは大きい問題ではないかと思っています。

新聞記者は時間をかなり縛られる仕事で、これまでの男性記者は家で子育てをしたことがないという人が珍しくなかったと思います。そういう記者が年を重ねて管理職に就く。だから、だんだん女性記者も増えてきましたが、育児についてはこれが今面白いですよ、みんなの関心事ですよ、と最前線で取材をしてきたとしても、じゃあそれをどのような記事に仕立て、どんなふうに発信していくか、という意思決定の場には、まだまだ少ないので現状です。

私が論説委員になったのは、恐らく自分が産休・育休を取った際に、復職しようにも子どもが保育園に入れず、待機児童になってしまって、あれやこれやおかしいことが多くなるかと思った経験を連載にしたのがきっかけになっています。当時、岡山市は待機児童が849人で全国ワースト2位。わが

子は特定の施設に入園を希望しているという理由で、その待機児童にも数えられない「隠れ待機児童」だったんですね。厳しい保活を通じて、見えている数字の外にも困っている人がいるっていうことを身をもって知った。でもやっぱり行政担当記者にはピンとこない。私は本来、文化を扱う部署で備前焼なんかの担当していたのですが、当事者だから書こう、書いた、書けた、という経緯があります。

今の部署では、例えば赤ちゃんが車に置き去りにされて亡くなってしまったという事案があった場合に、これまでの社説ですと、「なぜ救えなかったのか」というような責めるトーンがあったのですが、「どうしたら救えたのか」という風にしましますよと提案しています。本当にちょっとした違いですが、論説の女性割合は現在25%ですので、こうして増えていくことで視線が変わっていけばいいなと思います。

先日も岡山県の人口流出について、実は若い世代の女性ばかりが出ていっていて、これでは少子高齢化が進みますよね、という社説を掲載しました。女性の転出が多い傾向は2000年ごろから見られるようになって、2021年までの累計では男性を7700人も上回る、という内容でした。記事をつくるときは委員同士で背景や課題を議論して内容を深めていくんですが、男性陣は「こんなに暮らしやすいところなのにどうしてですかね」と首をかしげるんですね。でも、かつて「若い女性」だった者からすると、「いやいや、まだ古い男女の役割意識が残っていて、結構息苦しいですよ」と。女性に限らず若い人の意見も汲み上げられる組織になっていかないといけない。多様性を持たせていくことが不可欠だと考えています。

あと、メディアとしてはスピード感とかそういうものに対応できないと感じます。双方向の意見交換の場としては、もうSNSとかが当たり前になっていて、新聞は遅いよね、不便だよね、と言われると思います。それでも山陽新聞は明治12年の創刊で、144年の間ずっとここ岡山で人々の営みを見て、書いてきた。その積み重ねを思えばまだできることはあるんじゃないのかなと思います。地域のプラットフォームとしての再構築と言いますか、皆さん今どんなことが心配ですか、こんな取り組みがありますよっていうようなことをもっともっと伝えていけるのではないか、と考えています。

第3セッション

教育者の視点から

国立大学法人 岡山大学
教育推進機構 准教授
吉川 幸



今、岡山大学で大学生の教育に関わると同時に、岡山県教育委員会の夢育アドバイザーとして高校生の探究学習などをサポートさせていただいている。その中で思っていることをご紹介したいと思います。

今回参加するにあたって、こども家庭庁の「こどもまんなか」のことを改めて勉強してみたのですが、こども家庭庁が創設される時の資料を拝見した時に、気づきがありました。この高校生、大学生ぐらいの年齢層のところに例示されている取り組みの例が、実は全て、高校生が探究学習で取り組んでいるテーマに近しいのです。高校生の関心事との親和性がとても高いと思いました。



岡山県内には 80 以上の高校があり、そのいくつかに委員や講演講師などの形で関わらせていただいていて感じたのですが、生徒たちは様々な問題に关心を持っています。例えばいじめ問題、第三の居場所、心のケアや不登校への关心などです。さらに SDGs に刺激された社会課題、例えば「食品ロスをなくそう」、「資源の無駄遣いを減らそう」などへの关心の高さや、自分たちにも何かできるのではないか、やってみたいという意欲を持っています。このことを多くの方に知っていただきたいと私は常に思っています。高校生はとても積極的に取り組んでいます。程度の差は多少あれども、中学生も同様です。それらのテーマが、こども家庭庁のテーマとして集約されているように思えて、こども家庭庁はちょっとすごいぞというのが、最初の感想です。

高校では2022 年度から「総合的な探究の時間」が始まりました。政治や社会が高校生にとって一層身近な存在になっ

先ほどニセコ町様と厚沢部町様から、自治体の取り組みにこどもたちのアイデアを取り入れているとの紹介がありました。高校での総合的な探究の時間等の取り組みは、生徒たちが 18 歳になれば投票権を持つことや、成年年齢の引き下げが起きているという社会の変化を知り、自分たちが社会と無縁ではない存在なのだという理解を育てるきっかけになっているのではないかと思います。

教育においては「社会に開かれた教育課程」を目指しているというのはよく言われることなのですが、私が注目しているのは、自ら問い合わせ立てて探究する力の獲得です。こども、あるいは中高生と申し上げてもよいと思うのですが、学校で学んだ教科学力をどのように社会の出来事と繋げていくかということを考えるのに、この総合的な探究の時間や総合的な学習の時間というのが上手に機能しています。

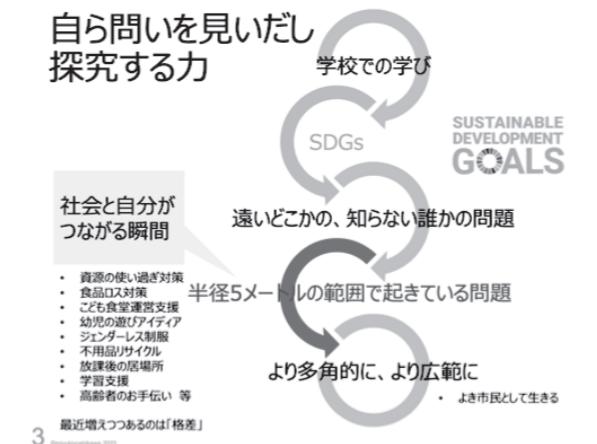
高校 総合的な探究の時間

- ・政治や社会は一層身近に
 - ・選挙権年齢 18 歳へ引き下げ
 - ・成年年齢 18 歳へ引き下げ
- ・教育では
 - ・目標 “よりよい学校教育を通してよりよい社会を創る” を学校と社会が共有、連携・協働しながら
 - ・新しい時代に求められる資質・能力を育む「社会に開かれた教育課程」の実現を目指す

【総探 基本的な考え方】
小・中学校における総合的な学習の時間の取組を基盤とした上で、各教科・科目等の特質に応じた「見方・考え方」を総合的・統合的に働かせることに加えて、自己の在り方生き方に照らし、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、自ら問い合わせ立てて探究する力を育成

2

が複数ある繊維産業の県です。なぜ女子の制服はスカートなのか、男子はスカートを履いてはいけないのか、というような話が、ジェンダー問題のテーマで話し合われることもあります。

自ら問い合わせ立てて
探究する力

3

他にも、小さいこどもたちのお手伝いや学習支援、高齢の方のごみ出しのお手伝いなどといった、半径 5 メートルの範囲にありそうな課題を、高校生が自分の課題として考える機会ともなっています。

こどもまんなかのパンフレットを見ると、「こども」とは誰のことか、というようなことで、年齢規定はされていないけれど、大体高校生以下を想定しておられるのだろうと思われる記述があります。15 歳から 18 歳ぐらいの高校生は、こどもというには大きいけれど、大人になりきってもない途中段階にいます。彼らは支えられる側にいるだけでなく、支える側に

Q 「こども」とは、何歳までのことでですか？

A こどもは未就学児から就学年齢といった年齢の範囲を「こども」といいます。
こどもはまだ社会を知らない状態の範囲にして、社会や世界に適応していくことを目指します。

支えられる側にいるだけでなく、
支える側にもなりたい気持ち、
なろうとする意欲



5

もりたいと考えています。成長段階とともにやがて自分も支える側になっていくのだという彼らの自覚を大切にしていたらよいのではないか、ということをお話できればと思っていました。

進学や就職により、「いざれこどもは地域からいなくなる」といったような話があるかもしれません。でも、育った地域の記憶は残るでしょう。その記憶が子どもたちの成長の過程の中で、地域への関心としてまちづくりや社会貢献に向いてくることが大いにあると私は考えていますし、家でも学校でもない「第三の居場所」としての地域の存在というのは、とても大切です。

大人にとって都合のいいこどもだけをまんなかにしないで、全てのこどもをまんなかにすることも大切だと思っています。さきほどの平井さんのお話を聞いて、大人もそうなのかと思いました。家庭と職場だけが居場所じゃない、地域も居場所になるし、その居場所を作る側として積極的に関わっていくけるような、そんな大人が増えたらよいのではないかでしょうか。

第3セッション

ママから見た奈義町

子育てママ（奈義町在住）
大内 仁美



私は7年前に奈義町に引っ越して、1年後に子どもが生まれてすぐに支援センターを使わせてもらったのですが、子どものおもちゃや遊ばせるところが無料で遊べてすごく助かっていたのもありますが、子どもだけではなく、家で子どもと1対1で遊んでると、やっぱり外に出て大人と会話ができるのがすごく私的には良かったです。

子育てをしてると社会に置いていかれてるような感じになりますが、そういうところで社会に参加していると感じられるのはすごく良かったな、と思っています。

奈義町に引っ越してきてまだわからぬこともありました。が、「自主保育たけの子」に参加させてもらって子どもたちが奈義町のいろいろな場所で遊ばせてもらって、自分自身も奈義町を知らなくて子どもを通して奈義町の場所を知ることができる、そういうのがすごく良くていい取り組み、いいところに参加させてもらったなと思います。



また、さきほどみなさんは行かれたと思いますが、私も「奈義しごとえん」で仕事をさせてもらっています。子どもを預けてまで仕事をしたいというより、子どもと一緒に生活をしていきたいので、仕事もして、ちょっと1時間、2時間、子どもと離れるという働き方はすごく難しいじゃないですか。就職でもない、アルバイトでもない、その間を取ってくれた「しごとえん」はすごくよかったです。子どもを預けなくても仕事ができるのは心強かったです。

子どもが3人生まれて在宅支援金を3人分もらえる時は、パートで仕事をするよりも収入面、経済的にもすごく良く、この奈義町の仕組みはありがたかったです。

すごく奈義町の子育て支援にどっぷり浸かって楽しんで生活させてもらっています。今は奈義町の幼稚園に1人、保育園に2人、通っていますが、それも上が3歳以上の人には3人目からは無料で子どもたちを見てもらったり、働けることで収入面でも助かっているなと思います。奈義町のそういう支援にはすごく助かっています。



奈義町に引っ越してきて初めてチャイルドホームに行くときには、そもそもこういう支援センターというのも知らなかったのですが、保健センターの方からベビーマッサージからやりませんか、と誘っていただきました。まだ奈義町にママ友というか、そういう繋がりもなかったですし、そこで初めてママ友の横の繋がりができて、とてもよかったです。

奈義町は本当に子育てをしやすいなと実感しています。

意見交換の様子

第1分科会 子育てに安心を



第2分科会 子育てに社会応援を



第3分科会 こどもまんなか社会に



分科会報告

第1分科会 子育てに安心を

モ^デレーター
中橋 恵美子



「子育てに安心を」という問題テーマそのものとして、安心できない要素は社会にあるのではないかと問題提起しました。子育てしにくいと思う母親が、全体の7割もいます。子育てしにくい要因の1つは、金銭的に不安があるということ。2つ目は、社会の理解や支援が不足している、と感じている。3つ目は、職場の理解や支援が不足している。この3つが子育てに不安を感じたりする子育て家庭、特に母親が多いことを紹介しました。

また、子育てをしている人ではなく、これから子育てをする可能性がある若い世代の人たちが、子どもを欲しいと思わないと言っている人が4割近くに上がっています。これは、子育てが安心できる社会とは少し遠いのではないかと考えながら自治体の取り組みを伺いました。

1 自治体の取り組み

子育てが不安、負担の要因である経済的部分をサポートするために、どの自治体も出産祝い金や小学校の入学祝い金などまとまったお金をしています。あるいは、国が定める以上に上乗せをしているなどの発表がありました。その中で富山県朝日町の経済サポートが手厚く、生後6か月から2歳になるまでは、月額6万円の支給、更には、2歳から3歳の間でも月額3万円の支援をしています。

更に、他ではやっていない取り組みとして「こどもノックル」というお子様の送迎課題と同じ施設を利用する方同士の共助で解決するマイカー送迎サービスなど移動のサポートの話も伺いました。

第2分科会 子育てに社会応援を

モ^デレーター
山下 真実



どこかの自治体が突き抜けて頑張り、1番初めに取り組みを行うことで、近隣自治体も負けてられないと思い、周りも取り組むことが多いようです。

2 多機能型の居場所

社会の理解が不足していることで、居場所をつくろうという取り組みもありました。自治体では、居場所づくりを行い、団体ではその運営を行うなど、初めは子育ての当事者が集まる場を提供していたところから発展し、一時預かりや放課後の子どもを見るなど親子が集まるだけではなく、機能が複数まとまった多機能型の居場所を自治体が広げ、担い手となる団体も育ってきています。

自分の体の居場所も大切だが、心のよりどころも含めての居場所。しんどくなった時に、相談ができるような機能の充実が必要となってきます。今、子育てをしている人だけではなく、これから子育てをする人たちに、今子育てをしている人たちがポジティブに子育てしていることを、素敵だと見える、もしくは、子育てにひと段落ついた人が、子育ての担い手として子育てに関わるような場づくりをしていくことが、これから大切になってくると思います。

1 企業の取り組み

「子育てに社会応援を」というテーマを、企業と自治体の掛け合わせでどういった取り組みができるか議論を行いました。行政の立場では、育児休業や時短勤務の取れる制度など様々な制度をつくり、既存の制度を拡充して認知を高めています。企業内では規定として盛り込んでいくことや制度の活用を後押しすることも進んできています。これを三者のプレイヤーとみると、行政は制度をつくり、企業は取り入れ、個人は利用するという構図です。個人が育児休暇を取りたい時に、制度があっても自分から休暇取得のための手立てを見つけないと取得しにくいというフル型のサービスであることが多く見受けられます。この急激な人口減少の社会を乗り越えるためには、三者それぞれがカバーする領域を増やして、サービスの認知や利用促進に向けて互いの領域を寄せ合ってプッシュ型にしていくことを問題提起しました。

1 企業の取り組み

三社電機製作所では、上司の理解や働きかけが成功要因で男性の育休取得実績が高くなっています。ちゅうぎんフィナンシャルグループでは、半分以上が女性という環境で、働きながら子育てをすることが定着したことで両立支援のフェーズは超えて、両立して働くことからスタートし、社員たちの能力を発揮し活躍を後押しするところへシフトしています。西松屋チェーンでは、社会全体で子育てをするという機運を作っており、売り場作りや事業全体を通し会社自体が子育てを応援しています。萩原工業では、働く時間を柔軟に調節できる仕組みがあります。他社でも似たような仕組みがありながら利用しにくいことがあります。萩原工業ではみんなが

利用できるアットホームな雰囲気により、実際の利用に繋がっています。ほいらくからは、保育園探しの視点だけでなくユーザーから聞こえてくる子育て課題として、男性育休を取得しても実際に子育てに関わっていないのでは、という問題提起も頂きました。奈義しごとえんは、仕事を紹介するだけに終わらず、子育ての楽しさを生み出すために、孤立した育儿ではなく社会との繋がりを作る取り組みを行っています。

2 歩み寄りの姿勢

行政・企業・個人の三者が、お互いに歩み寄る中で、例えば病児保育を行政が制度として整えて利用してくださいとなつた時に、あるだけでは使えません。子どもが病気の時に病児保育を利用した時に、早めに3時に上がりますと言える職場があるかどうか、それにより、病児保育も3時に上がれる職場も、両方生きてきます。行政・企業・個人、それぞれがその領域を歩み寄ることが今後も重要となってきます。

分科会報告

第3分科会 こどもまんなか社会に

モデレーター
岸田 雪子



「こどもまんなか社会に」というテーマでは、一体何の真ん中なのか、この「こども」とは誰のことを指しているのか、こどもを真ん中にしてくれるのは誰なのか、などを考えながら議論を行いました。

こども基本法の中で国や自治体に義務付け、今年の4月から色々な地域でも模索されているが、まずは身近なこどもの意見を、ひとりの人として尊重し聞いていこうという話もありました。

何かの役に立つだろうからとりあえず聞いておこう、ではなく、自分の意見が社会の役に立ち、社会を変えることができるんだという、こども自身の自己肯定感を高めることにつながるような取り組みを、各地域でやっていくことも1つの「こどもまんなか社会」だという意見もありました。

1 様々な「こどもまんなか社会」

厚沢部町では民間と連携し、家族で1~3週間移住体験をしながら、こどもが保育園に留学する形で関係人口を増やすための取り組みを行っています。地域を体験した経験が、大人になって故郷のような思いを抱き、成長していくこどもの記憶に残っていき、成長した後にも地域との縁を繋いでまた戻ってくるなど、こういった地方創生の在り方もひとつのこどもまんなかではないでしょうか。

男性中心の企業では、女性の視点を持つことも、こどもまんなかに通じるといえるかもしれません。子育てする時に、女性はこどもの何について主に考えているかを想像することも、大人がこどもを主体に尊重することにつながると言えます。女性やこどもはどういう風に考えているのか。そんな

考えをもつことも社会を動かすきっかけづくりになると考えます。

2 こどもまんなか社会

「こどもまんなか社会」とは、全てのこどもを真ん中にしていくこと。全てのこどもを主体にし、全ての大人がこどもの意見を聞き、尊重しながらできることを考えることが大事になります。そして、このこどものまんなかを社会に、と考えた時に、地域の中でこどもが育ちやすい場所、そして親も育てやすい場所、地域のハブになるような拠点がとても重要であり、それをやれるのが地域力や地域を作っていく力を持つ自治体なのではないでしょうか。

それぞれの地域が拠点作りをし、それぞれの中でこどもが過ごしやすくするために、親も心のゆとりが必要です。親にとっての拠点もとても大事で、子育て支援とこども支援、こどもの育ちやすさ、親の育てやすさや過ごしやすさが重なることで地域の拠点づくりに繋がっていくのでしょうか。

閉会挨拶

奈義町教育委員会 教育長 和田 潤司



奈義町教育委員会教育長の和田でございます。

本日は、全国子育て応援会議にあたり、こども家庭庁の高橋様をはじめ、地方自治体のみなさま、そしてご後援、ご協賛をいただきました企業のみなさま方、本当に様々な立場のみなさまにご参加をいただきましたこと、そして、有意義な会議が開催できましたことを、心より御礼申し上げます。

実は私、一昨日はB&G全国教育長会議に出席しておりました。過去最高の人数の200人を超える教育長が集まっておりました。地域のこどもは地域で育てるというテーマでございました。そのこともあって、大変たくさんのお教育長が集まつたと思っております。

このように、子育て支援は社会の未来を築く上で不可欠な要素だということの表れだと思っております。

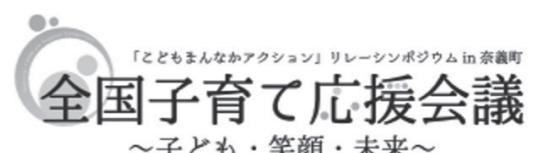
本日は、子育てに安心を、子育てに社会応援を、こどもまんなか社会に、という三つの分科会におきまして素晴らしい報告や熱心な議論が行われ、子育て応援の前進に向け大きな成果が挙げられたのではないかと思っております。

今後、私たちは本日の会議の議論を活かし、より良い子育て環境を築くために、本日お集まりのみなさま方とともに連携と協力をしっかりと取りながら、子育て応援のネットワークを強化していくことが大切だと思います。

本日ご参加いただいたみなさまと力を合わせて、本日の会議の成果を地域社会、そして国全体へと広げ、実行していくではありませんか。

終わりになりましたが、本日ご参加いただきましたみなさまの益々のご健勝をお祈りいたしまして、全国子育て応援会議閉会のご挨拶とさせていただきます。

本日は誠にありがとうございました。



「こどもまんなかアクション」リレーシンポジウム in 奈義町
全国子育て応援会議
～子ども・笑顔・未来～

報告書

発行日／2024年3月19日
発行所／(編集) 奈義町 情報企画課